

## 重度精神薄弱児への人間学的接近（第5報）

—— 発達するというこ と ——

村上 英 治 ・ 赤 塚 大 樹<sup>1)</sup> ・ 細 野 純 子<sup>2)</sup>  
後 藤 秀 爾<sup>2)</sup> ・ 後 藤 かをり<sup>2)</sup> ・ 大 島 伊久代<sup>3)</sup>  
柴 田 裕 子<sup>3)</sup>

これで四たび、毎年夏のおわりともなれば、もう定められた年中行事であるかの如く、私は、私の仲間とともに（古くは3年、4年とつきあってくれた仲間から、新しくこの年また加わることになった仲間をもふくめて）、愛知県心身障害者コロニーへのなだらかな坂をのぼりつづけてきた。

5日間という限られた短時間の間であるにしろ、日ごと、重度の障害児者たちと、それぞれそなまのすがたでとりくみ、夜ごと、その日その日の体験記録をもとにしてのおそくまでの討議と、その都度積み重ねられてきた、体験と資料の集積が、今、私の脳裡に浮かび、またかなりの山をなして、私の前にある。

障害児者の世界と、その世界の中での彼らのありかたを、外からの局外者的視点からながめるのではなく、まさに、彼らの世界と同じ世界に身をおき、共存在の人間を実感すること、いうなれば、まったく共通の地平に立つ人間同志、ブーバーの“我一汝”の共感的人格的共存存在を基盤とした関係において出会うこと、こうした視点を大切にしながら、私たちの人間学的接近はすすめられてきた。“かかわりの体験をとおして”こうした研究の志向性と意義を強調したのが〈序報〉である。つづく〈第2報〉では、私たちの仲間それぞれが、最初の出会における、当惑、驚愕、あるいは衝撃から、次第に、障害児者に内在する純粋性・可能性に心うたれていく自分の変革を意識しつつ、“我一汝”関係の深化へと展開し、究極“私の内なる障害児”への志向をめざしてかかわる過程を考察してきた。

この四たび目の実習をおえた今、これまでのふたつの報告をふまえた上で、今度はより具体的な症例への接近を深めることを意図し、ひとつには、私たちの仲間のひとりの、5日間にわたる、ひとりの盲精神薄弱者との出会いを中心に、さらにまた、いまひとつは、もうひとりの仲間の、三年間ひきつづいた、ひとりの同じ精神薄弱児との継続的取り組みを、それぞれ、〈第3報〉および〈第4報〉として、事例報告的にとりあげてきた。

〈序報〉から〈第4報〉へこうした積み重ねを追っていくとき、私は、私自身仲間とともに、私たちの対象として、古いケースではすでに4年にわたって四たび、新しいケースでも1年の間隔をおいてふたたびと、こうしてかかわりつづけてきた子たちの、成長を、また発達を、今つくづくと考える。

年齢的には、まさしくこの期間、この子たちは満3年ないし1年にわたって、こうした療育の場の中で、ただひたすらに生きつづけてきたのである。

いろいろの事情もあって、これら個々のケースと具体的に、それらの年においてそれぞれかかわった、かかわり手の方は、あるときには積極的な意味をもちつつ、またあるときにはまったくやむを得ず、その都度人がいれかわった場合も少なくない。しかし、かかわり手のいかにかかわらず、それぞれのかかわり手が、その都度、“今、ここに”の観点にたつて、それら対象となったケースと、せいぜい“私の内なる障害児”を志向してかかわりつづけてきた体験、および、その記録は、私にとって、これら障害児者たちが、たとえどんなにその障害は重くとも、人間として発達しつづけているのだとの基本的命題を、あらためて明証化させてくれたもののように思われる。

重度の障害児者における発達とは何か。その意味

- 1) 中部労災病院クリニカル・サイコロジスト
- 2) 名古屋大学大学院教育学研究科教育心理学専攻修士課程学生
- 3) 前名古屋大学教育学部臨床心理相談室

をどのようにとらえていくべきか。“かかわりの体験”を重視するこの一連の志向性をもった療育実習の中で、これらの課題に答えるために、私たちはやはり、今度も、この年こうして加わった10数名の私どもの仲間の、具体的に担当した個々の障害児者とかかわってきた体験にもとづく、行動の現象的様態をとおして、人間の“発達するということ”の意味を模索していきたいと考える。本稿、この〈第5報〉で意図するところのもの、まさしくこの志向性に連なるものにほかならない。

## I 重度精神薄弱児における発達の意味

精神薄弱児の発達をどのように考えるか。それ以前に、一般に発達をどのように考えるか。研究者の発達観によって、その視点はさまざまである。それら多様な発達観をここで整理し、体系化づけることは、本稿の意図するところではない。重度精神薄弱児も、人間である限り、当然発達の可能態としてとらえられるべきであることを考察の出発として、ここでは、具体的にその発達の可能態としての精神薄弱児とかかわるかかわり手が、これら障害児者、ならびにその世界についての彼ら自身の認識を、あるいは、その行動の具体的変容をとおして、あるいは、かかわる場そのものの発達、変革をとおして、どこまで深められるかを問いかけることが課題となる。それはまた同時に、そうした療育的立場に立つかかわり手自身の、自己変革にほかならないし、その自己変革をとおして、今までみれどもみられなかった重度の精神薄弱児の発達の微妙さを、そしてまたその豊かさを、とらえることが可能になってくることをも意味するものである。

個体の内部構造の自律的成長、成熟と、教育をふくめての外的な社会的、生活的環境との相互関連の中で営まれていくところの発達の様相は、幼児や精神薄弱児を対象として考えられていくとき、従来ともすれば、それらを対象化し、観察の視点をすえおいたまま、外部からいわば客観的に分析することに、そしてまたその分析にもとづいての法則の定立に、終始してきたきらいがなかったとはいいい得ない。しかしながら私どものこの一連の研究の位置づけからすると、これらの受動的・静的な視点は、この場合どうしても一応研究の方法論としては相対置するものといわねばならない。それら対象者自身、人間として、そのおかれた歴史的・社会的条件に当然規定されながらも、なお、それにあえてたちむいか、挑戦し、自ら主体的にそれらを変革せしめることによって、自己変革そのものをめざしていこうとする、人間主体

の、のがれることかなわぬ、あくことなき、自己実現への志向性を、その根底において確信することから、私どもの発達観は出発する。

たとえそのおかれた状況が、ぬきさしならぬぎりぎりの極限であろうとも、すなわち、その障害がいかに重くとも、いや重ければ重いほど、こうした人間の主体的とりのくみの可能性を私どもは期待する。もちろん彼らの言葉が貧しく、その自己実現を表現する手だてにおいて、多くのハンディキャップをになうこと自体は否定できない。しかしそれだけにこそ、彼らが発する表出行動の微細な変容にたえず眼をやり、それを“我—それ”関係としての道具性の次元でおさえてしまうことなく、その障害児者の声なき叫びをききわけ、見えない眼でのまさぐりをよみとろうとする、愛と信頼の人間関係に立ちつつ、彼らそのものの存在様態を、“私の内なる障害児”として私どもの中にとりこみ、まさにその障害児の内側から、それが発達の可能態であることをとらえようとする認識にたつて初めて、私たちは、これら障害児者の発達を、明確にとらえることができ、そしてそれにもとずいて、彼ら自身の明日への成長を、また一段とふみこんで期待しうるのである。

5日間という期間では、たしかにそこまでを期待するにはあまりにも限られたかかわりしかもてないかもしれない。しかし問題は、単にかかわりの物理的量、時間の長短ではないようである。かかわり手のかかわる構えの質の深まりこそがここでは問われているのだと考える。たとえ長期にわたろうとも、だらだらとマンネリにおちいった、慣習的・日常的療育の姿勢は、それはよしんば一瞬であれ、“今、ここに”世界を分かちもつところの共存在的人間が織りなす、人格的共感的な出会いには、その価値を譲らざるを得ないし、そしてその一瞬に、彼らなりにせいっぱい価値実現をめざして展開しようとする、人間発達の質的転換の契機を、明確によみとることができるようにも思われる。

不十分ではあろうが、私どもの志向する人間学的接近の意義はそこにある。発達の質的転換の契機ともあるいは考えられる、至高体験ともいうべき、その一瞬を、私たちが分かちもとうとしての、それはたどたどしいながらも、真に内側から障害児の発達に迫ろうとする、せいっぱいの努力の道程にほかならない。そしてそれが、療育に関与する私たち自身の自己変革につらなるものであるということ、十分意識しながら、こうして研究実習に参加した、私たちの仲間ひとりびとりが、みずからの内的な体験の深化の過程にそいつつ、そこで体験してきた行動の現象的様態、そしてその変容を、以下に

その記録として報告したいと考える。それら体験内容をもなった記述的事実からの現象学的本質の抽出が可能であることを示唆したいし、またそのような抽出の操作をとおして、療育者自身、それら発達の本質を見抜く眼を養うことを期待したいが故でもある。さらにまた、これまでの叙述からきわめて当然のことながら、こうした発達の過程は、かかわり手と、障害児者とのかかわる関係の場をぬきにしては考えられない。かかわるものと、かかわられるものと、その関係の発達をその相互の共感的関係を軸にしてとらえていくことが要請されるゆえんでもある。

## Ⅱ 行動の変容と本質の把握

精神薄弱児はたしかに変わっていく。単なる時間の関数として、量的にその心的発達が促進されるということとどまらず、たくましい質的変革をとげていく。等しい精神年齢の精神薄弱児と精神薄弱者とは、一方は、精神薄弱児収容施設、はるひ台学園重度棟に、他方は、成人精神薄弱者収容施設、養楽荘に所属するのは、まさしく、その生活年齢の違いによるが故にである。ところが、どうみても、後者は前者にくらべて、何かしつかりとして、やはりおとなだなどと思わせられるものをもつ。かかわってみて、また一層、その障害者たちが彼らなりにせいいっぱい、自分たちの生を生きぬいてきたんだなどの実感をもたされる。

何が、彼らをしてこのように成長させ、発達させ、時には、明確な自己変革を意識せしめていくのであろうか。彼らの中に内在する秘めたる可能性の発芽が、ようやく時機を得て時熟したというのであろうか、あるいは彼らの療育されている環境の中で、彼らが向ける関心の対象としての外界そのものの違いの故なのであろうか。たしかに、はるひ台から養楽荘へ移っていった、私どもの対象児のひとりに、その明確な変革はみとめられた。しかしまた、それぞれの療育の場は移らないにしろ、1年ぶり、あるいは2年ぶりに出会う障害児者の成長は、ときには私たちの眼を見開かせるものがある。

そうして変わったものはいったい何なのか。外面的な行動の変容にすぎないのだろうか。いや決してそうではなさそうである。障害児者は、彼らなりに、その療育の場における、彼らとかかわる世界の展開を見定めているように思う。そして、その世界との取り組みの中で、彼らは、それらをとおして自己実現を一步すすめていこうとする志向性をもつ。こうした障害児者の変革をもたらず契機として、彼らとかかわる療育者との“出会い”が重要な意味をもつことは、今までいくたびも指摘したと

おりである。こうした発達観に支えられて、たとえ、対象のケースに始めてかかわった場合であろうと、この子どもたちとかかわってきた私たちの仲間は、それぞれそのかかわりの様相に、深まりに、その違いは当然ありながら、それぞれの状況の中で、彼らなりの自己実現への志向性をうけとめてきた。そうしてうけとめてきた行動変容の現象の様態を、発達という視点に照らして抽象化しようと試みるとき、そこに発達の真の姿としての本質が浮かび上がってこないだろうか。以下はそうした具体的実践をとおして、発達の本質をみぬこうとする私たちのささやかな試みの一端である。

### —1. 自己主張

#### カズとの勝負

“異様な臭い”ってどんなものだろうか意識してはるひ台へ。重度棟の扉を開いたとたん、それがわかる。臭いというよりは、子供特有の分泌物の中から発散されるような、膚を刺す様な刺激。アレルギーでじんましんでもできるんじゃないかしらん。なじめぬうちに、実習で私が勝負(?)することになっているカズとの対面。頭にはひまわり型ばんそうこうがベタリ。できたてのなま傷。傷をやたらさわったり、ぶっつけたりしないようにと、活動量の多い彼はうしろで両手をしばられている。“やられておるナ。”

部屋の中の子供たちには、ゴロゴロ床にころがっていたり、ポーッと、つつたつたり、視線のやり場なくフラフラしているのが多い。カズの顔はとてもしっかりとした。ひいきにしてるんじゃない。実際目つきが定まっている。カズは、カズの中に、カズ自身をちゃあんとしっかりつかまえてるぞ。そんなおちついたまなざし。

両手を離されたら、あたしにとびつき、おそいかかってくるかもしれないし、壁にガンガン頭をうちつけるかもしれない。ちっとやそっとでは近づけそうもない目。容易な態度ではすまされぬそんな目。やたら、知ってもいないくせしてお愛想よくするのはいやだと思った。彼の目には勝てやしない。彼の手のうちをじっくりみてとってから、私のアプローチはきまる。おもしろい奴だ(多少あせりも実は感じておるが)。素直でとっても人なつっこい人達は大好きだ。でも、それだけが生きる意味ではない。生きるということ、私としては、“カズのすわった目”がその答だと思っている。どうだろうか……

ほんとにカズはとってもいい顔をしてた。“好きになってもらおう”などという、例のいじましい根性を、もしも私が出しなどしたら、バシンバシンとやられてしまいそうな、きれいなものがある。すわった目。何かを、

何かを訴えようとしている目。

午後は<くつ下ごっこ>から始まる。衣類のはいつてるカゴをバシャンとあけて、くつ下の山、山。いっしょに、これにしようか、あれにしようか選んでみる。はいてみたら、デッカイ穴。足の半分がニョキッととび出しちゃう。少し手伝って“あと、やりなよ”。カズは手の使い方がヘタクソだ。手に力はいって何をするにもにぎってしまう形になる。それにもかかわらず、まあまあお互いがんばって“成功のあかつき”に笑いあう。そんな時の笑って内容ある。その成功感もつかのま、カズのベースに、それ以後ひっかきまわされることとなる。バケツを不器用にもっていくカズについていく。トイレの水道、水を入れて、便の残っている便器へ流しこむ。内心、便コネを連想してビクッとする。しかしさっきの楽しさに気をよくして“もう一回やろう”という事になる。カズは水のはいった便器の中に手をつっこんでバシャンバシャンやり出す。床にどっこぼれる。

突如かみつく。ジーパンの上から歯型がつく程かまれて。痛かったナ。

夕食時は、カズの前に保母さん不在、ちょっとうろろしてたら、カズが後ろの机を動かしてイスを出す。ものすごく不器用で荒っぽい動作だが、彼のやろうとする意味がわかる気がした。カズの横にあたし席を作ってくれたのだ（よね？）お互い坐っておちついたと思ったらカズがイスからひきずりおりてきて「手え、手え」と言う。そうであった。彼は手をまだ洗ってない。水洗いだけではなしに、石けんのありかまでも一応さがす。さんざんもめて、ゴムつきのタオルをつかんで床の上にとろんでのち、事がおわる。夕食はさんざんだった。となりのタカチャンにちょっかい出すのでピシャン。食事に対する緊張が余裕をなくして自分自身“叱るばっか”のギスギスしたものになってしまった。食事後、ちょっと不仲。

彼の行動に対応することってむづかしい。だってだけではすまされず、彼の動きの水準がいやおうなしにあたしを引っぱり上げるからだ。ゴハンをベチャッと顔にくっつけられるときなんぞ、びっくりしてしまう。しかし「もう、やらないね。返事は？」に片手をあげて（コレがおもしろい）、「ワーイ！」と、返事しながらも次の瞬間にはまた何事かをしでかす。“ワーイ！”の時、ニコッとするのには大人は負けてしまう。心をよまれてしまってる様な、こそばゆい感じ。それだからこそ、カズはおもしろいのかも知れない。

動かない子の多い中で、ほんとにカズは動いてる。からだ全部で要求してくる。彼なりのせいっぱいの自己

主張。相手にとって不足はない。“カズにまいった”を言いながらも、頑ばらなくっちゃ。（服部美也子）

### タカコのかみつき

タカコには“かみつく、髪の毛をひっぱる、便コネをする”という行動の特徴がある。文字で見ると、ちょっとした驚きをうけるだけだが、実際にかまれてみるとすごい。一日目、廊下で彼女に髪の毛をつかまれて、その手をふりほどこうと頭へ両手をもっていったとたん、ガブッ。“一度くいついたら離さない”という言葉でいく様なかみ方だった。痛さと、そして当惑、驚きで、一瞬、ものも言えない感じをうけた。プレイ・ルームではほかの手にもかみつく。保母さんには「この子は、ほかの手にかみつくから、一対一で相手をしてやって下さい。」と言われて、一日、タカコがほかの手にかみつかないよう監視していたみたいだった。

2日目になって、1日目にはやめさせようと考えていた彼女のかみつきに、何か理由があるような気がしてきた。私に対してかみつくのは、要求の通らない時ではないか。子供たちに対してかみつくのは何か。

3日目、彼女のかみつきは、決して、彼女の気ままな行動ではなく、他人との接触を求めている表現ではないのか、という感じを強める。だっこしてタカコが喜んでいる。フト、気を楽しにしたとたん、ガブッ。そんな時、どうして彼女を叱る事ができようか。かみつく事はいけないのだと、どうしてやめさせる事ができるのだろうか。タカコは、かみつく事によって、喜びを表現し、私にそれを伝えていた。それは、タカコの自己主張にほかならない。それをただ、やめさせるだけなら彼女から“他人との接触を求める行為”を奪う事になるのではないか。ほかの表現方法を身につけてやりたい。でもそれにはどうしたらいいだろうか。4日目にも、髪をひっぱるのはむしろ、気嫌の良い時だという感を、いよいよ深めることができた。

タカコが変わっていくこと、それは、タカコだけが変わる事ではなく、彼女をうけとめる私たちが変わっていく事ではないのだろうか。彼女だけが変わるとすれば、それは“適応”という名の、実際はもっとおそろしい“扱いやすい”“おとなしい”という、個性の失なわれた子供になってしまうだけのような気がする。タカコ自身も変化し、私達の姿勢も変わっていく事によって、初めて、そこに“一緒に生きていく人間同志”というつながりができる様な気がする。私たちが、彼女らに求めるのは、決して私たちにとって扱いやすい子ではなく、何よりも彼女自身にとって、よりよく生きる事である。しか

もそれは当然、私たちと共によりよく生きていく事なのだ。  
(香川晶子)

## 2. 世界の拡大

直に“ことば”が

直は、同じコロニーの中にある、はるひ台学園から去年の春、養楽荘へと移された。児童の施設から成人の施設へと。としをとってきたからだ。同じ施設であっても、まわりの環境はずい分変化したように思う。はるひにいた頃の直の世界はどんなだったかな。今あまりよく思い出せないけど。あの重度棟の中では、先生にしか働きかけることはできなかったし、先生しか相手にしてくれなかったようだった。その先生への働きかけも、腕をとったりとか、体で表現するもので、何か話しかけようとした時にも、それは充分には、ことばにならなかったように思う。

今年会った直は、絵本やきっぷ遊び、歌を歌う中で、

ことばを媒介として働きかけあえる。この数年間で、たしかに伸びているんだ、そんな驚きを僕に与えた。まだ、ほかの寮生とは十分にかかわりがもてず、もっぱら先生への働きかけが多い。しかし、あのはるひ台の重度棟にいた時、直の働きかけられる相手が保育さんしかいかなかった事を考えるなら、これはしかたがないことのように思える。でも、僕たちのいた5日間、直がほかの寮生に働きかけるのを何回かみだし、これからもっと直の世界が、寮生とのかかわりを通して拡がっていくんじゃないか。そんな期待がもてるようになっていく。

こんな直の変化をみる時、はるひから養楽へという環境が、まわりにことばが存在するということが、直に大きな変化をもたらしたと考えられる。この、直のことばの発達、直の外の世界への拡がりに対応して、内の世界でも拡がりをもたらしている様に思える。直にことば(まだ充分にはつながらないが)があるからこそ、5日間で僕と2人で絵をかくという事を通して、その楽しさ

	はるひ台学園 → 養楽荘
働きかける対象	保育さんしかいない → 保育さんに働きかけることが多い → 他の寮生
働きかけられる相手	保育さんしか働きかけてくれない ← ← ← ほかの寮生からの働きかけ
コミュニケーション	体で表現することが多い → 体で表現、ことばも用いる
ことば	十分に通じない → なんとか通じ合える →
遊び	1人遊び → 保育さんとの遊び(2人遊び) ← ← ← ことばを媒介した遊び → ほかの寮生との遊びへの発展

図1 直の成長

	遊 び	その中でのかかわり	直への感情	体 験
第1日	げた箱でスリッパ遊び、散歩	手をつないで散歩 いろんな話をする	楽しい、自分の近くに感じる	直のことばの発達を通して環境の差を感じる
第2日	絵本、歌(個室)	いっしょに歌を歌う 物理的に離される	直におどらされる、当惑、すまなさ	直の個室入りを通して施設のあり方を考えさせられる
第3日(面会日)	歌やレコード	好きな歌を歌うと気嫌がよくなる 直からの甘えを感じる	あせりがなくなる、余裕 日課の中で動こう	直の大人らしい面と、子どもらしい面をみる
第4日	キップ遊び	キップを媒介にして2人で遊べる	むりに日課にのせようと思わない 自由にさせてやりたい	直の自己主張に、生きているという感じ
第5日	絵かき	2人で創作する遊び	絵をかく楽しさをわから合える 何か通じるものを感じる	生活の場としての施設を考える

図2 直とのかかわりの変化

を共に感じあえる様なところまで、遊びが展開できたんだと思う。

まわりの世界の豊かさと、直の内の世界の拡がりがかみあった時、さらに直は、もっともっと彼の内なる可能性を伸ばしていく事ができるだろう。こうして5日、ふたたび直と、今までとちがったおとなの施設でとりくんでみて、直の中にはほんとに豊かなものを感じさせられる。はるひ台から養楽荘へと、直の成長を“ことば”をとおしてながめる時、それを図1のようにまとめる事もできよう。しかし、それをより展開させていく為には、まわりの環境の豊かさもさることながら何と云っても、かかわっていく側の基本的なとりくみの姿勢こそが問われてくるかのように思われる。

僕自身またこの変化を5日間なりに体験する。とりくみをすすめて、かかわりを深める時やはり、これも図2にみられるような変容で直の成長を僕自身、実感としてうけとめてきたといえるのではないだろうか。

（林 俊和）

#### 誰とでもトイレへ

全体として、ケイ子は身体的にも成熟し、言葉もわずかながら増えており、歌のレパートリーも増え、情緒的にかかなり安定してきて、少くともカンシャクを起こすことはなくなってきた。感情表現の仕方にも豊かさを加えている。とにかく成長してきている。自分自身にとっては、ケイ子を通して、人間の生きるという事実を、その重みを、体験し、考える機会を三たび与えられたといっただけよい。その事自体は、単に、我々の体験したかかわりが、両者の成長にとっての決定的ダメージとはならなかったという事の補償でしかないのであって、問題は、もっと、つきつめる必要がある。

過去三回、自分は、一貫して、歌を通じてケイ子とつきあってきた。最初は、トイレの中で2時間近くもつきあい、それが2年目はデイ・ルームになり、今年、中棟、寝床と変化してきてはいる。しかし、特に最初から「歌を通じて」という意図を持っていたわけではない。たまたま歌によって関係が開けて来て、また、それ以外でかかわるスベがなかったということ。自分とケイ子が、共有できるものとして歌によるかかわりをことさらに展開してきただけの事にしかすぎない。つまり、なりゆき上。そしてその中で、最初はケイ子おかかえのウォーキング・レコードプレーヤー的役割を担ってきた様な気もしないではなかった。たしかにレコードプレーヤーの前で、黙ってじっと耳を傾けて身動きもしないケイ子を見ていると、多少のちがいはあれ、たいして自分の歌を聞

く時と変わりはないようにみられた。それが、その後、自分に歌を要求する過程で、必然的に自ら歌うことを覚え、今年は特に、本当に嬉しげに、楽しげに、身体を揺すって、自分と一緒に、歌う事をケイ子を知る様になったと思う。そして、自分にしがみつき、一生懸命甘えたケイ子。こうして甘えさせっぱなしという事には、おそらく疑義もあるが、ケイ子の発達の一時期にとって、心から甘えるという事が非常に重要な体験であると、自分は考える。あまりにも短い期間にしか、それはすぎないのだが。そしてそれをとおして明らかに、レコードプレーヤーからの昇格を感じるのには、単に自分の受け止め方の問題だけなのだろうか。

4日目、自分の昼寝を見守るケイ子の中には、やはり、何かが……新しい感情体験が育ってきていると考えるに十分な根拠がある。今後、もっと歌以外で対人関係を持っていくことができるような……そうといったものの基盤になるようなものだと思う。もっとも、ケイ子における歌というものの在り方からして、歌からまったく離れての対人関係は、考えられないのだけでも。

そして、あれ以来、目ばしい大人とみれば誰であれ、トイレへ引っぱり込んで歌を要求するという動きをみせているケイ子。自分だけとの関係ではなく、“誰とでもトイレへ”とひろがったケイ子。たしかに、その意味でケイ子は“幸せ”であったにちがいない。そして、同じ意味で今年の5日間も“幸せ”であったにちがいない。自分とケイ子との、そして、誰とでもとの体験は、全体としてまさにケイ子にとって、クリティカルな快感情を体験するものであったに違いないのだから。

（後藤秀爾）

### 3. 自 立

#### 子供じゃないよ、大人だもん

“彼らを、彼らがあろうとする、あるいはあるであらうという存在の志向性、可能性の中で、受けとめて接することを、彼らが望んでいるのだ。”ということ、あきちゃん達の言動から今あらためてのように再認識させられている。

お風呂や掃除などの時、どちらかといえば彼らと一緒にではなく、彼らにかわって手伝おうとしてしまう私の態度に対して、はねかえってきたあきちゃんの言葉が「子供じゃないよ、大人だもん。」であり、同室の子に対しての、「赤ちゃんじゃないから、自分ですの。」「甘えとっちゃいかん、やんなさい。」であった。自分のまかされた責任分担をちゃんと、けなげに、セッセとや

るあきちゃんの姿をみたり、終日寝ころがったり、うずくまったりしているだけの、みっちゃんやひろちゃんが、あきちゃんにうながされ、バツとたつてふすまの戸をはめたり、枕カバーをつけたりする姿をみて“アッ、あの子達もできるんだ。”と、目を見開かされた思いだった。しかも、そういうあきちゃんのことばに、ハッとした私が、楽しく彼らの中にはいってゆき、ひとりでに、一緒にやっている事を感じた時、彼ら自身もまたほんとに、嬉しそうに仕事をやっているように思えた。彼らにとっても、自分にできる事、自分にできそうな事をやる事は喜びなんだろう、と感じさせられた私だった。

あきちゃん、当年24才、鈴木ビネー式知能検査では3才程度という。でもその自立性、責任性においては、私が、“えりを正さねば”と思わされた面、頭がさがる思いの面が少なかった。さらに「お嫁にいくんだ。まだ相手がおらんが。」とも言ったあきちゃん。「世の中出たらきびしいだら。つらいだ。」とも言ったあきちゃん。あきちゃんの夢、しかも自立を志向してのその夢は、ただ養楽荘の中だけに閉ざされていないで、外へも広がっていつている。

彼らなりに自立への志向、大人としての自覚の芽ばえがあるという事が、現実的にはないろいろ困難な面があるにしろ、新鮮な、ある明るい響きをもって、私の心の中にいま残っていることはたしかなようである。

(細野純子)

#### —4. 抵抗

アップレ、八重ちゃん

あれは実習4日目の出来事だった。第1日目には、あんなに調子良くお風呂に入り、体も、顔も、頭までも、ちゃんと自分で洗った彼女だったのに、その日は入浴前、気嫌をそこね、入りはしたもののすぐ出てこようとする。そんな彼女を叱りつけ、腕をひっぱり、水をかけ、なんとか石けんで洗わせようとする保母さんがた。結局、最後まで石けんにもタオルにも目もくれず、ガンとして洗わなかった彼女を見ていて、私は思わず声援を送っていた。“アップレ、八重ちゃん！”

今なお、あの、保母さんがた3人を前に細い体全体で精いっぱい抵抗していた八重ちゃんの、ジーンとあつイメージが時として私をおそう。にもかかわらず、物理的に八重ちゃんと離れている今の私のある部分は、こうしたなまなましい八重ちゃんを、出来得る限りしらじらしくつき離そうとしている。

「——しなさい」「——してはいけない」こうした命令・禁止の数々が、養楽荘の中いたる所に、日ぐらし充

満していた。保母さんがたは、とにかく寮生が定められたスケジュールにのって動くようにと、そればかりにとらわれ、時間においまくられ——と、そんな感じで——しかしながら、保母さんがたが、私みたいに、考え、迷い、悩み、なんてしていたら、おそらく寮生は、人間としての最低限度の生活すら満足にできなくなるだろう……。と、こんなふうを考えてくると、あの時、八重ちゃんがあんな風にして投げつけてきた、必死なものを無理やりもみ消してしまおうとする、今の私。八重ちゃんのそばで、彼女の体温を感じ、共に生きている感じを持っている時、今にも、八重ちゃんと一緒に、「こんな生活、モオイヤダヨォッ！」と叫び出しそうな自分だったのに。

(柴田裕子)

#### —5. 連帯

みんな、みんな、生きているんだ

さつき棟の涼ちゃんやすえちゃん達と散歩に行った。途中、中軽度の人達と一緒にになったら涼ちゃんもすえちゃんもつられて、たくさんの歌を歌った。夕暮れに染まるコロニーに歌がひびいた。手をつないで、ふりながら大きな声で元気に歌った。

“僕らはみんな生きている

生きているから 歌うんだ

手のひらを太陽に すかしてみれば

真赤に流れる 僕の血潮

はるひの子だって こぼとの子だって

養楽の人だって

みんな みんな 生きているんだ

友達なんだ”

思わず、私は大きな声で、自分にたしかめるように歌ってしまっていた。みんなの声が一緒になって、大きくなって、コロニーに響くみたいで、私の声もその中にはいつているから、よけい嬉しい気持ちがした。みんなが歌っている、心の底から歌っている。この歌、本当にいい歌だと思った。

生きる意味、云々、かんぬんという前に、“生きているんだ” “生きている、という事実があるんだ” ということを、この時また思った。そして、さらにその生きているんだという実感を、充実感にみだされて感じるのは、そういう中での、あきちゃんをとおしての、“友達”としてのつながり、つまり“連帯”の中でののだ。とこのときまたあらためて思い知らされた。現実の私は、あまりにちっぽけで、あまりに微々たる力しかないのだけれど……

(細野純子)

### みんなの喜びを喜びとして

ヨッチャンとの5日間、それは、私にとって何であり、ヨッチャンにとって何であったのか。

最初の日、私はヨッチャンの中にはいりきれないのじゃないかという不安におそわれた。ヨッチャンは、自分だけの世界を持っているように思われたのだ。レコードを聞くのも、ヨッチャンひとりの楽しみ。みんながいる部屋には入っていかず、誰もいない部屋で、呆然とした様子ですわっているヨッチャンを、よくみかけた。早くも私は、こういうヨッチャンをすべてとみなし、結論づけようとしていた。

そんな時、ヨッチャンの楽しみとしての積木をみつけたのだ。新しいヨッチャン、別の面を持ったヨッチャンをあらためてみなおした思いだった。私が近くにいる者を誘うと、ヨッチャンも一緒に呼んでくるし、積木を手渡したり、ほかの者の顔を嬉しそうに眺めてみたり。みんながいる事を楽しんでおり、みんなが喜ぶのを喜んでいるヨッチャンだった。

新しいヨッチャンにこうして気がついた時、そういったヨッチャンが他の場面でも、その姿をあらわにしている事、今までそれと気づかず見過ごしてきた事に思いあたった。ヨッチャンには常に、たとえば、シンヤの世話をしやらねばということが頭にあるようだ。シンヤは、ウーウーといつも唸っており、助けなしでは動けない。シンヤがヨッチャンと同室のためなのかもしれないが、食堂まで連れて行って手を洗わせたり、自分が寝転ぶ時は、シンヤも一緒に寝させたりする。重なりあって眠ったりじゃれあったりしている様子は、ほんとに兄が弟をかわいがってるみたいに見える。

養楽荘内での仕事も、模範生のようにやる。雨が降れば、女子棟まで窓を閉めに行く。掃除だというと、あれやれ、これやれ、と言われる前に、もう箒ではいている。自分で察して、その場その場に応じた行動をするのか、習慣となっているのかは、わからない。しかし、ヨッチャンの行動が、養楽荘の生活にあった行動であることはたしかだ。引っこみ思案であるとはいえ、仲間に対する、特に自分より弱者に対する心づかい、感心させられる。そんな時のヨッチャンは、積極的に行動する。こういったヨッチャンの行動、これはまさしく、仲間との“連帯”と言えるのではなからうか。（中野昌子）

## Ⅲ かかわるものとかかわられるものとの関係の発達

たとえ障害は重度であろうとも、このように彼らは彼

らなりに自己主張をつづけ、自分とかかわる世界を拡げ、自立を志向し、あるいはせいぜい、他者からの侵襲に抵抗しながら、また常に他者との連帯を求めているとする。

こうしたひとりびとりの精神薄弱児者の発達の具体的な様態は、やはりそのどれをとっても、かかわるものとの関係ぬきにしては、論じ得ない。人はまさしく関係の中で発達していくのである。働きかける、うけとめる、働きかえす、またそれをうけとめて働きかえしていく、そういった相互の関連性といったサイクルの中で、私たちは、発達の質的展開の重要な契機をみずから体験させられる。

そのかかわりは、もちろん、他人といった“ひと”との関係のみではない、“もの”とかかわりの中にも、それとかかわる以前とそれ以後における彼の変容のありかたがよみとれる。かかわる相手が“ひと”であれば、それが言葉をもって相互の関連が結ばれようと否とを問わず、そのつながり自体、相互の共鳴を伴って、かかわりの過程の中でもぶれしていく。そのときかかわるものが、どのような視座に立つか。またそのかかわる場の、両者双互の関係で生み出されてくる“間（ま）”のとりかたが、かかわるもの同志に与える働きはまたきわめて重要である。

ここではこの種の視点に立って、ふたたびこの年また、この療育実習に参加した仲間の体験の記録を、なまのまま提起しておきたい。私がかわるのでもない、相手がかわるのでもない、まさしく関係の場がかわるのである、といった観点が、こうした状況の中で、これらの障害児者たちの発達を支え、その過程に効果的に作用するものであることを、このときまたしても考えさせられる。

### —1. 仕事をとおしての“かかわり”

#### 機械じゃない、人間なんだ

あの単調な仕事から、あきらは、何の喜び——報酬——を得ているのか。普通、我々が労働する時、そこからは、かならず精神的又は物的報酬を受けている。もっとも幸運な時にはその両方の報酬を得ている。

あきらの場合、少なくとも、物的報酬は何も得ていない。

あきらにとって、もう一方の報酬——精神的報酬——はあるのだろうか。

話は、横道にそれるが、精神病院においても、作業療法の名のもとに軽作業が行なわれている。仕事それ自体からは、何の喜びも見いだせないようなものである。人



院患者達は、1)何かやらなければ、退屈でしょうがない。2)看護者達から、半強制的にやらされる。などの理由により、治療の一環であるという軽作業を、一日数時間行っているにすぎない。

作業をしているような精神病患者達は、当然ではあるけれども“金”の価値を知っており、その軽作業の報酬として、わずかばかりの金が自分の院内での小遣銭として、貯蓄される事が、その患者へは、“喜び”としてはね返っていている。

話をもどそう。

あきら達、重度棟の人間にとっては、まずほとんど経済的観念は、ないと思われる。これは、差別でもなんでもなく、そのままの事実すぎない。

あきらにとっても、僕の知っている精神病患者達のように、重度棟の中での毎日の生活が単調であるため、どんな単純な、面白くもない仕事であっても、やらずにはいられない。そうでなければ、その単調な時間のためにほんとうに気が狂っちゃうという心境であろうか。

たしかに、あきらたち——重度棟の彼ら——は一日ぼんやりさせておくのではなく、刺激を与え、動かさせてやらなければ、多分あきらたち、一人一人が持っていると思われる、動きうる可能性、芽すらを、決して芽ばえさせないでそのままにつぶしてしまうことになるであろう。

現実のあきは、あまりみずから動こう、働こうとしているとは思えない、そういう段階のあきらにとっては、あきらが機械でなく、人間である以上、何らかの報酬を得て、動く喜び、働く喜びを体得していく必要がある。

あきらを見た保母さんは言った。「あきら今日は、お客さんがいるからよく出来るね。」僕は、お客さんがいるから、ではないと思う。見ている人がいるから、ではないと思う。あきらがタマゴケースひとつ作るごとに、「よし、あきらうまくできた。」「さあ、又やろう。」と、あきらの成果をうけとめ、認め、はげましてやったこと、これが、その時のあきらの作業の能率を上げることになったのだと信ずる。たしかに、あきは成果をうけとめられ、はげまされた時なんとなく表情がゆるむのである。こんなことをしていると、あきらのそばにいたほかの寮生までが、自分の作ったタマゴケースを僕のところへ持ってくる。「上手にできているよ。」と言うと、喜んで帰っていき、次のケースにとりかかる。

“見られている”から、早くやろう、よくやろう、というのはもっと、もっと、巧みな生き方を身につけてきた人間のすることだと思う。あきらたちにとっては、何

も、“見られている”から、という理由でやる必要はないであろう。あきらにとっての作業の出発点は、その成果をあきらごとうけとめられ、そこから自分にはねかえってくる喜び、ただそれだけだと思われる。機械じゃない、ロボットじゃない、人間なんだから。

仕事の喜びの中で、多分、最高のものは、仕事と自分が、一体化され、その中に、自ら喜びを見出していくことであろうけれども、あきらにおいては、現在まだまだ、そういった段階ではない。

仕事を通してあきらをうけとめていくこと。おとなであるあきらたちには、仕事を通してのかかわり——ある作業を通してのかかわり——が自然なのかもしれない。

(赤塚大樹)

## —2. かかわるものの視座

### しあわせを分かちあうこと

精神薄弱者——それは、わりきって考えれば、何の罪もない一人の人間、大きな幸福をつかむ権利をもつという点にかわりがあるはずはない。幸男にしてもまたしかりである。

幸福とは、安定した日々の生活の中から自己の最大限の可能性を発揮し、身心とも充実した理想郷を実現することだと信ずる。だから彼、幸男とのかかわりにおいても、彼なりの幸福を精いっぱいつかんでほしい。そして、その幸福を自分と分かちあってほしい。そんな願いを抱いて5日間の生活をともにしてきた。そして今その気持ちに何ら変わりはない。

しかし、日一日と彼を知るにしたがって、身の自立どころか、自分の世界をも完全に保持している彼に直面する事によって、今の彼はそのまま幸福だと感じ、しかもそれは、たしかに実現できる夢と想を潤滑してくれる、歌を伴った自然的、必然的、前進的成長ですらあるのだと思う。無理するな、今の幸福のままでもいい、たとえ大きな世界を見る可能性があっても、無理しなくていいじゃないか。

そんな意識を自分自身知った時、自分の友としての幸男がいた。そして、自分の事を友として感じてほしい幸男がいた。そんな自分に、彼は日めくりを再三再四要求した。しかし最初の彼の要求と、最後の彼の要求は、同じ言葉であっても、私にはまったく異なって聞こえるようになっていた。たとえていうなら、それは、わがまま言っただけ、駄々をこねてる子供と、テニスコートで球を追いかける青年との違いに等しい。そして今、まさに私と幸男とこの二人はそのテニスコートにむかおうとしているのである。

彼に今一番必要なものは、自分を理解し、感じてくれる先生と、慰めてくれる母であるようだ。そして、もうひとつ、そんな自分を知る彼自身が必要になっている。先生が誰であっても、母が誰であってもいい。その中に彼は夢を持ち、生きがいを感じてくれる。そんな今の彼をみる時、養楽荘の中の彼は、やっぱり幸福である。彼なりに、先生と母とをその中に見いだしている。自分は、時として彼の母になると共に、行住座臥、できれば常に彼の友でいたい。いや、そうあらねばならないと信ずる。その中でこそ、二人がともにわかちあうことのできる幸福が芽生え、そこから発達が開いていくのだと信ずるが故にである。（讓 西賢）

### 三つの顔

コロニーにおける5日間の実習体験を通して、次のような結論とでも言いうるものを体得した。つまり、私の子供に対する見方（視座）が変化することによって、子供のうけとめ方が変化し、それがやがて、二人の関係の展開へと拡がってゆく、という事のように思う。私にとって、最初はゴリラのゴン太であったアツオがわが子になり、次に弟になり、最後にはひとりの独立した人間そのものになっていった過程を感じる。そうした体験の中から、子供の発達にとって、何よりもまず、このかかわるものの側の、その子供に対する見方の変化がどうしても必要なんだという実感が得られた気が今している。

かかわる側の私は、三つの顔を待っている。それは、一つには学生としての顔、第二には子供の側にたった時の仲間としての子供の顔、そして第三には管理者（子供に対する）であり、職場で子供と共に生活をする、施設労働者である保母さんの顔、その三つなのだ。

第一日目、私は第一から第二へ、そして第三へとそれ程の抵抗もなく、ごく自然に移行していった。その一日がおわって、最後には管理者としての自分を認めざるを得なかった私なのである。

子供の顔をめざした二日目、私はアツオのお父ちゃんじゃなく、アツオのお兄ちゃんとして、二人の関係を位置づけていた。それは初日の、管理する自分の立場を否定し、反管理者的な関係を兄弟関係として、おきかえようとしたもののようにも思える。もちろん、この時においても、常に子供の顔を志向してはいたのだけど。こうした状況の中で、私は一つの枠組みの中で子供の顔を保ちつづけることが、どんなに困難であるか、いつも管理の枠があり、そのスケジュールの中で自由にやらぬ子供、そして私をそこに感じずにはおられないでいた。

第三日目、彼との散歩を許された私は、二人でノンビ

リと散歩に出かけ、そこでひとつの出来事を通して、私はひとりの人間としてのアツオに真に触れることができたと思う。そこにはもう、保母の顔も、学生の顔も、そして子供の顔もない、そしてオトウチャンでもオニイチャンでもない、アツオの“何か”になりたかった自分、アツオの“何か”になるために背伸びし、アツオを自分のペースにあわせようとしていた自分がいたのではなかったか。三日目になって、やっと私はアツオに対し、何の枠組みも、何の構えも、何の姿勢も、まったくない、ただ一人の人間がそこにおり、もう一人の人間がそこにいて、その二人の人間が素朴な感情でつながっているという感じをもつようになった。そうした人間関係の姿としてたち向う事ができるようになったのである。それは、原初的なもの、何よりも根源的なものであったように思う。そうなった時、初めて私は、アツオのありのままをうけとめて、アツオの動きの流れの中に自分が素直にはいれてゆき、ごく自然にその流れのうちに流されてゆく、暖かい人間のふれあいの中にいる事を感じられてきた。彼の動きをマネることによって、その真剣な表情と、その動きの楽しさ、を感じあうこともできたのだと思われる。

こうして、アツオとのかかわりの深まりの中で、コロニーのはるひ台重度棟に対する評価も大きく変化してきたように思う。その存在すら否定していた重度棟を少しでも許せるものにしたい、との願いへと移り、さらに、現在の重度棟を、子供も人間、そして保母さんも人間、その裸の人間同士が、ギリギリの極限状況の中で闘っている、哀しい存在である人間同士が精いっぱい自分を出してぶつかりあっている、すさまじいばかりの、けど、そこにいる人はみな、素晴らしい、そんな気持ちで受けとめられるようになってきた自分に気付くのである。

四日目になって、アツオに対する私の視点はふたたび深まっていったと考える。子供の内面により深くわけいる事を志向し、さまざまな試みをしていった。そうしたことをとおして、私たち、かかわる者の働きかけの、質的な高さ、量的な大きさによって、アツオはもっと成長してゆける子だ、それなのに、彼の成長を阻害しているのが、今のコロニーの状況ではないか、といった見方が確立してきたし、さらには、アツオの成長を保障し、促進させるためには、一対一の親密なかかわりをよりもつことの必要性を感じさせ、その時のかかわるものの、人間観・精薄児観といった、まさにその人自身であるところの本質的思想そのものが、今ここでの中核の課題なんだと考えるようになってきた。そうした点において、これだけは言うまいと思いつつも、やはり現在の保母さん

に対して、どうしても注文をしなくなってしまう私がいる。子供の要求を聞く前に、管理体制の動きの中できめつけてしまうことを自分では意識しないところで、いつのまにかしてしまっているのではないか。もっともっと子供の言葉に耳を傾けてやる事はできないのだろうか、などなどの注文が。

アツオという、一人の人間の存在、それは何なのか。彼の存在の意味は。こんな問いは解決もなく、重々しく私の心の中に残っているだけだ。何もできぬ私は、せめてこの重みだけは忘れたくない、そう思っているにすぎない、コロニー実習をおえてのこの頃である。

(江口昇男)

### —3. 接することと離れること

#### ヤスフミのほおずり

私とヤスフミとの関係は、まず原則的にヤスフミの世話——食事・トイレ・手洗い・散歩など——は私が責任を持つ、というところに成りたっていた。世話する必要のある場合は私は積極的にヤスフミに接していった。しかし、世話するといっても、ヤスフミはあまり手のかからない子で、私たちがいる間、ほとんど何のトラブルをもおこさなかったし、私が働きかける以外、ヤスフミからの働き返し、働きかけは非常に少なかったから、その次元では、私は保育さんがわりの命令者で、ヤスフミはそれに従っているだけという感が強かった。

ただ、日がたつにつれてヤスフミは、食事のときおかわりの要求を出せるようになってきたり、散歩の時わがままがいえるようになってきた。このことからして、ヤスフミの私に対する認知は、少しずつでも変化していったと思う。

遊びの時間は、私とヤスフミは二人が同じ場所にいるという以外、行動レベルでのかかわりあいはいまあまりなかった。ヤスフミはほかの人間に働きかけるという事も、働き返すという事もほとんどなく、一人で歩いたり走ったり寝ころんだりするだけだし、私は私で、もっと働きかけの多いほかの子供たちの相手をしていることが多く、二人がくっついていることの方がむしろ不自然だったから。

しかし、そういう状況の中でも、私は常にヤスフミを意識してなるべく自然に、なるべく多く彼に働きかけていくようにした。その多くは、空振りに終わったけれど、しかしそうする事によってごく自然に、私はヤスフミの中に入っていったのではないかと思う。

ヤスフミの大人に対する働きかけの一番目立つものに、ほおずりがみられたが、私以外の人にも、相手が

大人であるなら誰とでも無差別にするようだし、感情的なものより、感覚的・儀礼的な面が強いのではないかと最初私は考えていた。しかし、同じ儀礼的な朝のほおずりの中にも、次第に意味ができてきて、私と顔をあわせる時のヤスフミのまなざしが変わってきたように思う。私を待つような、甘えるような様子を感じとれるようになってきた。最初の見知らぬ他人という認知から、次第に親しい人という意識がヤスフミの中にわいてきたのではないだろうか。それはただ、毎朝挨拶を交しあう程度の親しさにすぎなかったかもしれない。しかし、そうしているうちに、たとえわずかでも二人の関係はたしかに変化してきた。私が意図的に変化させたわけでも、ヤスフミの方から強く働きかけてきたわけでもなく、ごく自然に何の無理もなく変化してきた。私とヤスフミとの間に、いわば適当な“間”が出来てきたといってもいいのだろうか。

(大島伊久代)

#### コウメイへののめり込み

人間は本来、その存在の孤独さに耐えて生きるべきものであるのに、ひとつの腕の中にどっぷり浸る様に、ふたつの個体が相寄って、言葉なく頭を垂れるものでありたい。それが私に開かれたもう一人の人間への道だとしたら、そこにコウメイと私の間で、私の側の溝があり、ものさしがある。

昨年私をのめり込みだといってみても、妙な白々しさだけが舌に残る。ただ、距離なく彼の横に居ただけなのであって、そして彼が笑い、行動するたびごとに、そのいとしきにただ足をすくわれていっただけなのであって、私は私自身子供そのものではなかった。何もわからない私がなしたそれは一人相撲にすぎないのである。そこにおいて、時に私は彼の前に立ちふさがる規制者であり、彼を追っかける邪魔者であり、世話をやく看護者であった。本質的にどうあればよいか、自分の姿を見失った行為であって、知っていながら抜き差しならぬ泥沼にはまり込んだ、のめり込みではなかった。ただ、私は自分のためと、彼の笑顔のために必死だったのである。しかし、私自身の心の中から外へ道は続いていた様な、そんな気だけは、今なおたしかである。

今年、私は彼の邪魔者になることをしなかった。規制者の役割も最少限にとどめた。もうすこし自分を離れて、彼の行動を考え、したいことを、見たありのままに、素直に受けとっていかうとした。それなのに、コウメイにとっては本当にその方が良きそうに思えても、どうしても、私からの常ならぬ距離の長さがみえた。私は彼をいとしいと思う。もっと自由になってほしいと思う。自

分の感情の呪縛からなのに、私は、彼の母の様でもあった。彼を私の子供であるかのように見ていた。五日間だけの。——それはいいことなのだろうか——もはや、それは開かれた人間と人間としてでなく、何故か、安易さの上に座りこんだ、一種の居心地の良さのようなものであった。この方が彼は自由で明かるい。この方が私は嫌われない、かえってより深い接触がもてる。でもおちついて安定するということは、私の心の中で罪悪なのであって、心は、いつか、おそらく人間として本当であろう私の存在を、閉じこめはじめる。そんな感じになりかけたとき、五日間は終わっていた。（福谷初枝）

#### ヤスオとカヨリ

コロニーから帰り、日がたつにつれて、実習中のなまなましい感情は当然薄らいでゆくけれども、何故かヤスオのイメージが日々強烈になり、私の心の中に定着してゆくのがわかる。それは、険しい顔のヤスオであり、ほほえみ、私の顔を手さぐりするヤスオであり、手をとられて不安げに歩くヤスオであり、喜々として跳びはねるヤスオであり、「何時帰る。何時帰る。」と繰り返す叫ぶヤスオであり、上向き加減に鼻歌を歌うヤスオである。それらがみんな混然と詰まったヤスオ。ヤ・ス・オ。

何故にこのようにヤスオが私の中に定着するようになったかと思い、ヤスオと私の五日間を振り返ってみる時、私たちの関係は、決してただひたむきに合致しあう方向へとスムーズにふくらんでいったのではなくて、多くの、一見ある意味では反拗しあう面をも含んだ、デコボコの過程であったように思う。そして、私たちの関係を築き、豊かにしていった多くの一里塚の中で、大きな跳躍台として、二日目の強烈なパンチと四日目のトイレでの「オレ、先生と居たくない。」を思い出すのである。

この、ある意味で拒否的な彼に、私は動揺し、たじろぎ、一瞬引き下がった。まさに、ハッと我に返ったのである。そして、その時はおぼろげながら、“ヤスオ”と“私”の関係を想い、それを契機として、またヤスオと接していったように考える。この「離れること」を体験して以後、また楽しい時間をすどす中に、私の中に彼とびったりという形で密接していなくとも、関係のあることの確信が生じ、緊張のない心からの楽しさがうまれてきたのである。彼の拒否は、ズケズケと一方的に関係を求め、ヤスオの働き返しを喜び、ヤスオの心に侵入していった私、ヤスオの悲しき苦しきを自分の中にとりこんでしまい、私自身、悲しく、苦しくなるとまさにのめり込んでしまった私を、その盲目的なめり込みから引きもどし、豊かな関係へと展開させるに不可欠の

ものだったにちがいない。

のめり込んだところに関係はできない。一体となりたいと思う人間とその相手には関係の出来る余地がない。しかも決して一体にはなり得ない。だから、関係はできない。ヤスオとの関係の中で“離れる”ことは、“没我”の状態から“我”をとりもどす力となったし、新しい“接する”ことの展開の力ともなったように思う。離れているところ、物理的にも、精神的にも離れ、呼びかけあわぬところにはもとより、“関係”の生まれよう筈がない。しかし、物理的には離れていても、相互に呼びあい、求めあうところには、“かかわり”の契機となる関係が存在し得るのではないだろうか。むしろ“離れること”にも積極的な意味があるのではないだろうか。「接すること」「離れること」も関係のうちであり、両方の中での呼びかけあい、応えあいが、豊かな人間の生きざまをつくり出していくものであると、いま私は思うのである。（後藤かをり）

#### Ⅳ 重度精神薄弱児における発達の場合

成長するということ、発達するということ、“ひと”と“ひと”との出会いを契機として、その相互の関係をより深めていくと同時に、世界内存在としての障害児者自身が、そのかかわる世界をより拡げていくことと、いうなれば、それは同じ意味をもつものでなければならないといった視点に即して、これら一連の研究は志向されてきた。

当然それは、これら障害児者を客体として把握する方法論を、この段階では極力排除し、いかにして、その相互のかかわりを内的に深め得て、いわゆる“内なる障害児”としての捉えにまで迫りうるかの、きびしい問いかけであり、また模索にほかならない。こうしたひとりの“ひと”との“であい”から“かかわり”へとの関係の深まりを体験して、始めてこれら障害児者は、より多くの、彼らをとるまく、“他物”とか“他者”への真の開かれをみずから認知するであろうし、そのとき、その発達は、彼らにとって、より拡げられたものとなっていくことであろう。

重度の精神薄弱児者と、今年またこのようにしてかかわった、私どもの仲間のこの種の認識は、かかわる子どもの行動変容の現象の様態をとおして、それから抽出される、発達という営みの本質を直観的によみとることを推進せしめ、またそれらの発達の具体的様相は、まさしく、かかわるものとかかわられるものとの相互の関係をそのものの発達としてとらえられるべきことを確信づける方向へと展開していったものと思われる。

このとき、私どもはあらためて、人間が人間として意味深く生きること、——その成長と発達を支える場としての、特に、その主体的自己変革を積極的に促していく援助的働きかけの状況としての、療育の場自体のもつさまざまな意味を問いかけていかなければならない。私どもが短時日のかかわりしかもてないこと、しかしそれだけにこそ、そこでの一応、全身全霊こめての結びつきの深さが、かかわる対象としての重度精神薄弱児に発達の原点をさし示し、そこから人間としての意味深い生き方を一步ふみださせる契機を与えてきたものであること、これらについては、これまでの報告の中でも再三考察してきたところである。

だが彼ら重度精神薄弱児者にとって、彼らの人間性に根ざした主体的変革を志向しての生きざまは、その生命のある限り、無限につづくものといわざるを得ない。彼らは彼らなりに、自らその志向性を、その変革を言葉で十分謳いあげることかなわぬながら、せい一ぱいに生きることの意味をからだ全体で高らかに、叫びつづけていこうとする。その叫びをうけとめ、それに応えていくためには、その障害児者たちと行住座臥そのかたわらにあって、生活をともにすすめていくものでなければ、それに対応し得ないこともまたきわめて当然である。事情がいかようであれ、人間発達の温床ともいべき家庭にあって、母なるひと、あるいはそれにかわる養育者からの、深いつながりをもった結びつきが得られぬ状況にある、こうした施設収容の障害児者たちが、主体的な自己変革をもふくめて、自己実現の道程を歩み出そうとするとき、彼らがおかれた療育の場における、彼らにかかわる保母・指導員たちの役割の重要さをふたたび思わざるを得ない。その場限りの断面的時点でのとりくみや、継続的ではあるが、間隔おいての、そうした時点の積み重ねだけでは不十分な、人間のいのちの流れに即して、その流れを追っての不断のかかわりの深まりと拡がりが必要されるが故にである。

日ごと夜ごとくりひろげられていかねばならない療育の場で、これらの深いかかわりを常に念頭におきつつ、ひとりひとりの障害児者たちと取り組んでいくこと、しかし、これは現実には不可能であるといつてよい。第一に、私どものような5日間という限られたかかわりでは、たとえ全身全霊こめてぶつかり、その一瞬に、かかわる側のいのちを燃焼しつくしたとしても、実習終れば、あとはその場から離れて、そこでのかかわりの体験をふりかえりみる余裕もてるのに反し、行住座臥の取り組みでは、それらのゆとりは得られず、ただ一途に取り組めば、取り組むほど、蓄積する疲労のために、いか

にかかわろうとも、かかわりきれず、結局自分がたおれてしまう結果にならざるを得ない。また第二に、療育の場そのものが、いわゆる行政的発想にもとづく体制側からのかなりの程度のしめつけを、認めざるを得ない状況にあることはきびしい現実である。日常の療育体制は、さまざまな制約の上に立って、こうしたかかわりの深化を志向することを抑制するし、また集団療育の場であるということから、ひとりひとりへの配慮が、二義的になることをもまた否定しがたい状況であることもたしかである。

現実の日常性という視点から、療育の場のもつ規定を、制約を、こうして十分見定めるとき、こうした、ひとりの“ひと”と、ひとりの“ひと”との深いつながりを重視して、発達の場をおさえていこうとする視点に、かなりの批判がよせられることを、私どもは十分承知しているつもりである。にもかかわらず、なおあえて、一貫してこの種の接近の意義を私どもは強調してきた。現実の状況の中で不十分であり、不可能であるからといって、彼ら障害児者たちの真の意味での発達をおさえてしまっているきらいはないだろうか。子どもたち自身、人間として意味深く生きることの権利を剝奪される結果に、いつの間にかおちいらされてしまっていることはないだろうか。内的人間の発達に常に眼を向ける視点は、状況がたとえきびしくとも、いやきびしければきびしいほど、そのためには、いかなる方策を、いかなる接近の様式をとるべきかを不断に問いかける。私たちの試みてきたこの一連の実践は、ささやかながら、この種の問いかけへの私たちの応えでもある。このような視点に立って人間発達の意味をあらためてみなおしていくこと、それは、そのような体験をみずからのものとした私たち自身の成長であるとともに、この種の接近の可能性を示唆することによって、施設職員など、行住座臥この子たちと不断に取り組むことを要請されている多くのひとびとにとって、何らかの刺激ともなり、糧ともなることを期待するからにはほかならない。

本研究は、名古屋大学教育学部における昭和48年度教育研究実習に参加した実習生の体験報告、ならびに、実習期間中はもとより、実習前後数次にわたる、参加者全員の共同討議にもとづいてまとめられたものである。本実習には、執筆者として名を連ねたもののほか、本報告中に体験の記録をよせた学部学生、林俊和・福谷初枝・江口昇勇・香川晶子・中野昌子・服部美也子・讓西賢の7名、さらに実習直後、信楽青年寮に職を奉じたため最終的な記録はよ

せられなかった。学部聴講生、北川倫子が加わり、同様討議にも参加した。したがって実質的には、15名の実習参加者全員の共同研究というべきであろう。

本来、本報告では、〈第2報〉の後記に述べられている、あの段階で意図しつつも、別の機会にと委ねられた、重度精神薄弱児における発達の意味、“変わるということ”の問いかけに答えるべき志向性をにうものであるが、そのとき焦点づけた、同一ケースを継続担当した上でのかかわり体験の変容を中心とする考察は、〈第4報〉後藤秀爾の症例報告に委ねられ、本報告では、本年この4年目の実践にのみ限って、この年の実習参加者が体験した、ひとつひとつの行動の現象の様態と変容を素材に、発達の本質を抽象する眼を学ぶことを、特に意図しての考察・検討がすすめられた。

〈序報〉から〈第5報〉まで、この種の研究をすすめていくに当たっては、日常の療育体制がかなり乱されるのもいとわず、4年にもわたり、私ども大ぜいの仲間を暖かく受け入れて下さったのみならず、時には連夜の討議にもすすんで参加して、有益な示唆と、きびしい批判を加えていただいた、はるひ台学園高木園長、養楽荘稲垣荘長をはじめとする、両

施設の指導員・保母のみなさんがたの御支援に心かななる感謝を捧げるものである。さらに、発達障害研究所能力開発部門富安室長の、実習期間中を通じての適切な御助言とはげまじや、その他コロニー内関係者各位のいつにかかわらぬ御厚情にも、あわせて深く、ここで謝意を表したい。

#### 文 献

- 村上英治・蔭山英順ほか 1970 重度精神薄弱児への人間学的接近（序報）——かかわりの体験をとおして—— 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），17，1～19.
- 村上英治 1971 重度精神薄弱児への人間学的接近（第2報）——“私の内なる障害児”への志向—— 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），18，1～15.
- 村上英治・後藤かをり 1973 重度精神薄弱児への人間学的接近（第3報）——ある盲精神薄弱児との出会い—— 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），20，51～60.
- 村上英治・後藤秀爾 1974 重度精神薄弱児への人間学的接近（第4報）——三たびケイ子と—— 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），21，13～23.

## A HUMANISTIC APPROACH TO THE SEVERELY MENTALLY RETARDED (the 5th report)

—— To Clarify the Meaning Concerning the Development for the Mentally Retarded ——

Eiji MURAKAMI, Daiju AKATSUKA, Junko HOSONO, Shuji GOTO,  
Kaori GOTO, Ikuyo OSHIMA, and Yuko SHIBATA.

Through our seminar to experience for us to contact internally with the severely mentally retarded in the Aich Prefectural Colony, we intended, this year, to clarify the significant meaning as to their development for the mentally retarded.

We believe that the mentally retarded truly continue to grow as a human being, even though the degree of retardation is so severe. And we have always been thinking how careful and kind treatment for education could support their real development.

Along to the clear orientation that the development for the human being must be conceived as inner development which are brought forth only through the mutual relationship between the one person and the other person, we have tried to deepen our experience of contacting with the severely mentally retarded, and to clarify the aspects and the meaning of their development.

In this study, based on the case report in which each therapist arranged his inner experience to contact with his own case, we attempted, at first, to abstract the substance of the development as the human being, for instance, self-assertion, the enlargement of their outer world, independence, resistance, cooperation and so on, and secondly, to think about the significance of the situation where each therapist has internally the mutual relationship with his respective case.